

# 学校外支援の構造と機能

—公的中高生施設「ゆう杉並」とその周辺のエスノグラフィー—

生涯教育計画コース 新 谷 周 平

The Structure and Function of Out-of-school Support:  
The Ethnography of the Facilities for Teenagers 'Yu-Suginami' and its Neighborhood

Shuhei ARAYA

Many teenagers go from school to out-of-school space. School no-attendance, social withdrawal, leaving school and so on. Some projects to prepare out-of-school space for teenagers have been carried out by municipalities or non-profit organizations, and how to support teenagers has been examined since the late 1980s. However, it is necessary to examine not only the way to support inside a particular place but also the function of this support in a whole out-of-school space including teenagers who refuse the support by adults.

In this paper I tried to make clear the structure and function of out-of-school support through an analysis of the relationship and interaction among facilitators, teenagers who take advantage of facilitators' support and teenagers who refuse them.

I adopted ethnography as a research method, which aims to describe the culture of others. The fields I observed are one of the facilities for teenagers, 'Yu-Suginami' and its neighborhood.

What I found out through the ethnography are the following. Yu-Suginami is used by many and various types of teenagers because of 'casual and conscious support for each teenager's needs' by staff members. But some teenagers refuse the facilities because of 'pedagogical action to deviation' by staff members. The potentialities and limitations of the support out of school should be considered based on the structure and function of out-of-school space.

## 目 次

1. 研究の目的と枠組み
  - A. 「学校外」と「居場所」論
  - B. 本研究の目的と枠組み
2. 研究方法と対象
3. ゆう杉並利用者の若者たち
  - A. 多様なニーズ
  - B. 多様な距離のとり方
  - C. 漸次的参加
4. 非利用者の若者たち
  - A. 児童館の「中高生タイム」に集まる男子高校生たち
  - B. 夜の区役所前にたまる高校生たち
5. 職員の認識と行動
  - A. 利用者各層に対する認識と「やりたいことの何

## 気ない支援」

- B. 非利用者層に対する認識
  - C. 「教育的はたらきかけ」
6. おわりに—「学校外支援の構造と機能」および残された課題

## 1. 研究の目的と枠組み

### A. 「学校外」と「居場所」論

不登校、ひきこもり、高校中退、高卒無業者(フリーター)の増加、「学びからの逃走」、「学力低下」など、十代の若者に関わる現象が社会問題、教育問題とされている。これらの多くは、これまで十代の若者にとって当然いるはずの場所であるとされてきた「学校」から若者たちが「学校外」の世界へと漂い出ていることを表していると考えられるだろう。実際、大多和(2000)は、

1979年と1997年の質問紙調査から、高校生の生活世界に占める学校の比重が低下したことを示し、学校が準拠集団として機能しなくなる可能性があることを指摘している。

そうした問題を語るなかで「居場所」という言葉がしばしば登場してきた。この言葉は、不登校の子どもの居場所づくりをきっかけにして用いられるようになったこともあり、「学校外」というイメージを伴いながら、おもに「ほっとできる場所」、「ありのままの自分が受け入れられる場所」という主観的な意味合いで用いられてきた(東京シューレ編2000, 芹沢2000, 住田2001, 新谷2001)。

その後、「居場所」が必要なのは不登校の子どもたちだけではないとの認識が広まり、90年代以降子どもや若者の「居場所」研究が教育学、社会学、心理学、精神医学、建築学等さまざまな分野においてなされてくる(久田編2000, 藤竹編2000, 住田ほか2001, 田中編2001など)。社会教育の実践・研究のなかでは「居場所づくり」という言葉によって、一人でも行ける、特に目的がなくても気軽に立ち寄ることのできる場として受け入れられ、実践されてきた(佐藤1998, 新谷1999)。そしてそれは、団体育成と非行対策を中心とした従来の青少年行政に代わる支援方法論として理解されている(久田2000, 田中2001b)。たとえば、久田(2000)は、「居場所」を「子どもや若者が大人になるために不可欠な条件としての人間関係や空間」とし、その場をつくる大人の役割が重要だという。田中(2001b)は、「他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場」を「居場所」とし、そこにおいて関わりをつくり出す「指導者」と若者による「参画」の重要性を述べる。

いずれにしても社会教育実践やそれをめぐる研究のなかで、「居場所」は、当初の「ほっとする場所」という主観的意味内容を越えて、学校外における子ども・若者支援の方法論へと具体化されてきたといえる。

## B. 本研究の目的と枠組み

確かに、学校外における支援のあり方を論じることは重要である。学校から離脱し学校外へと漂い出ていく若者を支援する方法は、集団的な活動へと組織化していく従来の方法では難しいであろう。その点で、「居場所」をめぐる実践や議論が十代の若者への新たな支援のし方を提示してきていることは評価できる。

しかし、特定の実践の場内部における支援方法論をいくら議論しても、それだけでは多くの若者が学校外

の世界へと流れ出るそのなかで、そうした支援が誰にとって、どのような機能を果たしうるのかはわからない。誰が支援される場に来て、誰が来ていないのかという問題を取り上げなければならない。なぜならば、若者世代は一般に大人社会から距離をとった文化を持っており、さらに学校を忌避する若者の中にはそうした者が多いと考えられるからだ。最も困難を抱えた若者が、学校、学校外双方の支援から遠ざけられてしまう可能性も否定できない<sup>1)</sup>。

また、従来社会教育、とくに子どもや若者を対象としたものは、学校教育の補足としてとらえられることが多かった。学校五日制に対する主要な反対論も公的サービスの切り捨てによる学力、教育機会の階層差の拡大をその根拠としている(たとえば藤田1997)。たしかに、現状で学校教育がその機能を減じた場合、社会教育等学校外の公的私的サービスがそのすべてを代替することは不可能である。しかし、若者の学校離れが進み、学校教育の機能が縮減されようとしている今、学校外における支援がどのような機能を果たしうるのか、その可能性と限界を明らかにしていくことが求められる。

したがって、本稿では学校外支援の構造と機能を明らかにすることを目的とする。構造とは、一般に諸要素間の相対的に定常的な関係パターンからなる全体を表す(森岡ほか編1993)が、ここでは、居場所提供を目的としたある公的施設を取り上げ、それを利用する若者、利用しない若者、支援する大人の三者を要素としてその関係を見る(図1)。

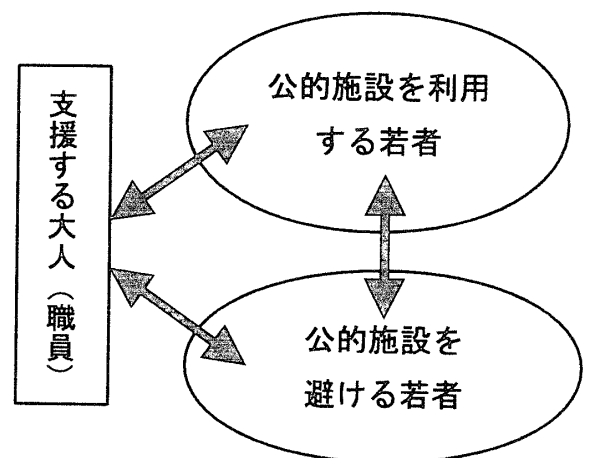


図1 学校外支援の構造

この三者の関係が織りなす構造は、当事者の主観とは別に外在的に存在するものではない。むしろ、それぞれの行為主体の自分たちや他者に対する認識によっ

てこの構造は構築され、また、それがひろがえて当事者の認識や行為に影響を与えていると考えられる。職員の側にとっては、どのような若者が施設を利用しているか、あるいはどのような若者に利用してほしいかといった認識が、職員の施設観、若者観を形づくり、実際の支援のあり方に影響を与えている。若者の側にとっては、公的施設や自分たちをどのような存在ととらえるかが、利用のし方を規定する。しかもそれぞれの認識はひとつのものではなく、さまざまな声が重なり合っている。それらが調査者との対話を通じて現実として生起してくるのである。したがって、この現実には人々の認識や語りの変化によってつねに再構成され、変化していくものなのである(古賀2001)。

このような三者の認識と実際の行動を見ることによって、学校外支援の構造がいかにつくられているのかを知ることができる。そしてその構造のなかで学校外の支援のもつ機能を明らかにできるものとする。

## 2. 研究方法と対象

学校外における支援をめぐる、職員や若者がどのような認識をもってどのような行動をしているかを明らかにするためには、特定の実践に対して継続的に参与し、詳細な観察とインタビューを重ねる必要がある。そのため、本研究では方法としてエスノグラフィーを採用する。エスノグラフィーとは、フィールドワークの方法を用いた調査研究、またその成果としてまとめられた文章・テキストのことであり(志水1998)、それは「他者の生活世界がどのようなものか、他者がどのような意味世界に生きているかを描くこと」(箕浦1999)である。

本研究の対象は杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」およびその周辺地域とし、そこでの観察とインタビューの記録、文書資料をデータとする<sup>2)</sup>。ここでゆう杉並を取り上げる理由は、ゆう杉並が十代の若者への居場所提供を目的とした施設であること<sup>3)</sup>、他の類似施設がほとんど十代の若者の利用を得ていない(金丸1999)なかで、相当多様で多数の利用があることからである<sup>4)</sup>。そのことによって、職員や若者のどのような認識、行動が多数で多様な若者の利用を可能とするのか、また、それでもなお利用をしない層は、職員や若者自身のどのような認識と行動によって生み出されているのかを見ることができる。それによって、学校外における公的支援の可能性と限界を明らかにすることができるだろう。

## 3. ゆう杉並利用者の若者たち

ゆう杉並は、「主たる利用者の中・高校生とする『大型児童センター』」として1997年開館し、ロビー、体育室、ホール、スタジオ、学習室などの設備がある。利用形態は、①自由利用、②団体による予約利用、③ゆう杉並主催事業への参加(講座・オフィシャルチーム等)の3つがある。ロビー、体育室、ホールが通常、自由利用となっており、一人で来てもいつでも利用できることが、従来の施設と異なる居場所提供型施設の特徴であろう。専門の講師が呼ばれて開かれる各種講座は、ギター、ヒップホップダンス、陶芸、お菓子づくりなど15種類にもわたり、それぞれ月1回ずつ開かれる。ほとんどの講座は連続ものではなく、1回ごとの申し込みであるため、利用者は1回で辞めることも、継続して参加することもできる。より継続して活動したい者はオフィシャルチームに参加する。ダンス、バスケ、バドミントンなどがあり、月2回の講師のいる練習と自主練習が行われている。

はじめに、ゆう杉並を利用する若者たちがどのような意識で、またどのようなかたちでこの施設を利用しているのかを明らかにする<sup>5)</sup>。

### A. 多様なニーズ

まずはじめに、ゆう杉並を利用する若者は、多様なニーズでここを訪れる。たとえば、オフィシャルバスケットに所属する者のなかには、学校の部活動に属している者、いない者を含めてさまざまな背景をもつ若者がいる。まず、中学卒業後留学し帰国、大検受験予定で高校に通っていないためバスケットをする場を求めて来た者、全日制高校を中退後通信制高校に通っている者、体育推薦のある高校のバスケット部の練習についていけず退部し、バスケットのできる場を探して来た者など、高校の部活動に所属しておらず、他に練習場所を求めて来た者がいる。その一人はいう。

「ぼくがゆう杉に来たのは、バスケットがあったから。部活きつくてやめちゃって、居場所ない状態だった。今はバスケットやる友だちできて、居場所感じてる」

【2000.3.19】

他方で、中学、高校のバスケット部に所属している者も参加しており、彼らは口々に「こっちの方が楽しい」という。

「こっちの方が楽しい。学校がつまんない。(オフィシャルバスケットは)みんなうまいっすね。それとみんな仲い

い】 【2000.3.25】

このように学校の部活動では満たされない多様なニーズで若者が集まっている。彼らはここで学校の部活動とは異なる練習試合中心の練習のなかで技能を高めている。それぞれは個別の事情から生じた多様なものだが、ある地域で見ると学校外へのニーズが一定数あることがわかる。

### B. 多様な距離のとり方

次に、若者の施設への関わり方を明らかにする。たとえば、ゆう杉並のなかでダンスをする機会は、自由利用、講座、オフィシャルダンス、ライブなどがあるが、利用者の若者はそれらの機会を、それぞれのし方で利用している。

オフィシャルダンスのメンバーは、ダンス講座への出席や自由利用での自主練習、ライブ出演など施設の利用頻度も高く、職員や講師との相互作用も多いなど施設に対するコミットメントが強い者たちだが、そのなかでも参加の動機や程度はさまざまである。

「みんなそうだよ。ただだからやるかって」

【1999.12.18】

と軽い気持ちでダンス講座やオフィシャルダンスに参加し、高校3年生になると受験のために辞めていく女子高生たち。

歌やダンスで可能性を試したいと高卒後の進路に悩みつつオフィシャルダンスに参加し、

「普段は、学校にいるときとか、家にいるときとか、誰かといるときとか、ほんとの自分かどうかわからないんだけど、とりあえずダンスやってるときは、自分が今ここにいるんだなって、自分の存在を確認できる場所だから。自分はここにいたいなって安心できる」

【2000.9.28】

と、ゆう杉並を、他の場とは異なる「自分の存在を確認できる場所」と位置づける副代表のカオリ(高3)。

「おれらはもっとストリートとかでやってるような、ほんとにああいうダンスがダンスだなって思うから、やっぱ発表会っていうか、学校とかでやるような部活でやるようなそういう感じかな。ここは」【2000.9.28】

と、ストリート系のダンスを目指しながら公的施設でダンスをすることに矛盾を感じつつオフィシャルダンスに参加する男子高校生たち。彼らは公的施設の高度な設備や講座を評価しながらも、そこで活動することに違和感を覚えるというアンビバレントな気持ちを持っているのである。

他方、オフィシャルダンスやダンス講座には参加せ

ずに、自分たちのペースで施設を利用しているグループもいくつかある。プロを目指してストリートやクラブを中心とした活動をしつつ、発表の場としてのみゆう杉並のライブを利用する女子高生のダンスグループ「ワイプアウト」。「講座には出ない」といい、好きなきにふらりと来て、たまりながらブレイクダンスの回転技を練習していく男子高校生3人組。また、逆にダンス講座にのみ出席しているグループも、中学生の女子を中心いくつかある。

利用者たちはそれぞれ、施設に対して完全にコミットするか否かの二者択一ではない多様な距離のとり方をしているのである。

### C. 漸次的参加

さらに、そうした多様な距離のとり方をしつつも、徐々に組織的な活動へと加わっていくプロセスが観察された。オフィシャルチームに入る者もはじめから入ったわけではなく、自由利用で施設を利用し、あるいは単発のダンス講座に参加しているうちにその存在を知り、継続的に活動したいと考えて、参加している。

また、個人利用を主とする者が一定数いるが、そうした者たちは自由利用のロビーや体育室で何となく遊んだり話をしながら、職員や他の個人利用者と親しくなり、講座やオフィシャルチームに参加していくようになる。たとえば、中学時代不登校だった緒方は、当初1人か少数の友人とロビーや体育室にたまっていたが、職員や利用者のなかに徐々に知り合いを増やし、オフィシャルバドミントンに参加、中学卒業後、施設の運営に携わる中高生委員にもなっている。

学校教育や従来の社会教育実践が、組織だった活動に参加するかしないかのいずれかで、参加するとしたらその活動がどのようなものかをわからないままに参加しなければいけないものであったのに対し、ゆう杉並において若者たちは、自由利用や単発の講座によってゆう杉並の活動や雰囲気や周辺的に触れながら、それが自分に合うかどうかを確かめつつ、徐々に組織的な活動に参加していくのである。そうした関わり方をここでは「漸次的参加」と呼ぶ。

## 4. 非利用者の若者たち

このように多様なニーズに基づく多様な活動を可能とする施設であってもあえて利用しない層がいる。

### A. 児童館の「中高生タイム」<sup>6)</sup>に集まる男子高校生たち

ゆう杉並にほど近いある児童館では、ゆう杉並開館後中高生の利用は減ったというが、それでも男子高校生4人が常連となっている。職員は、  
 「(ゆう杉並は)俺たちの居場所じゃない、たぶん何かあると思うんです。いけないっていうか、ここの方がすごい気持ちいいっていう」 【2000.5.27】  
 と、彼らが、ゆう杉並ではなくこの児童館を「居場所」としていると語る。また別の職員によれば、「ゆうは身内で固まったグループで来るから、1人で行く子は居心地悪い」、「のけ者扱いされる」と感じているという。

しかし他方で、こうした児童館の中高生タイムの実践の積み重ねから建設されたことが、ゆう杉並を個人利用、自由利用を基礎とする施設にしたことも事実である。ゆう杉並の職員も、  
 「ゆう杉並はここにひとつドカンとできたんじゃないで、今までの児童館が積み重ねてきたものがあつたうえで、これがある」 【2000.9.28】

と述べている。さらに、先述したオフィシャルダンス副代表のカオリのように児童館を利用して、職員の紹介により、ゆう杉並でのより組織的な活動に加わっていった(すなわち漸次的参加)者もいる。

筆者「もともとダンスやってたんですね。児童館で」  
 職員「うん、だけど、同年齢の子とそんなに積極的につき合うんじゃないし。だけどそういう子たちとつき合わせたいんだよねーってあって、その職員の人が」  
 筆者「あんなに積極的だったわけじゃ？」

職員「ないんだよ。うーん」 【2000.9.28】

児童館の高校生たちは、ある意味ではゆう杉並から「のけ者扱い」されているともいえるが、ある意味ではゆう杉並の個人利用者と志向や活動形態が連続的な者たちでもあるのである。

### B. 夜の区役所前にたまる高校生たち

ゆう杉並をあえて利用しないもうひとつのグループは、閉館後の区役所前でスケボー、ダンスをしていた男子高校生たちである。彼らはクラブにも行き、タバコもお酒もやる高校生である。ゆう杉並のほど近くに居住しているにもかかわらず、彼らの多くはゆう杉並の存在さえ知らなかったが、筆者がオフィシャルダンスの話をするると次のようにいった。

「そういうとこって、管理人とかいるでしょ。縛られるのいやだから。なんていうの、そう、『自由人』なん

だよ。俺らは。…ゆう杉並の奴がどれくらいうまく知らないけど、本当にクラブとかで(ダンスを)やってる奴はここでやってるよ」 【1999.11.6】

彼らは、職員の存在を「管理人」というイメージで受け取っている。そうした大人がいるという事実だけで、そこは彼らの「居場所」とはなりえないのである。しかもこの感覚は、非利用者に特有なものではなく、公的施設でダンスをすることにアンビバレントな気持ちを抱いていたオフィシャルダンスの男子高校生の感覚とも連続的だといえるのだ。

## 5. 職員の認識と行動

次に、職員がこれまで述べた利用者層や非利用者層について、どのような認識をもってどのような支援を行っているのかを観察とインタビューから明らかにする。

### A. 利用者各層に対する認識と「やりたいことの何気ない支援」

はじめに、職員は、3節で見たさまざまな関わり方をする利用者層をそれぞれ認識し、その関わり方に合った支援を実践していることが観察とインタビューからわかった。

たとえば、ダンスをする者のなかでは、施設へのコミットメントの大きいオフィシャルダンスのメンバーに対しては、

「オフィシャルチームは、なかなかグループづくりができない子のために、クラブ活動つくったわけだけど、仲間づくりプラス、ニーズいってくれる集団として育てていくってこともあるかなって」 【2000.9.28】

と認識している。よりコミットメントが少なく、ライブの場や練習場所としてのみ利用する「ワイプアウト」については、

「ワイプアウトの子とかは、ある程度自分たちでやりたいこととかもあるだろうから。だけど大人に対して見てもらいたいとか、サポートしてもらいたい部分もあると思うんだよね」 【2000.9.28】

と述べている。さらに、ダンス講座を見にきた女子中学生に対しては、

「やりなつてしつこくいうといやがるから。見ていいよって」 【1999.10.16】

というように、それぞれのグループの関わり方を理解し、それに即した支援を行っていることがわかる。そして職員は次のようにいう。

「2階にしようが、受付にしようが、体育室にしようが、ロビーにしようが、その子が何やりたいと思っているのか、…そのニーズをちゃんと聞けば、その人に対しての援助はちゃんとできるし。…すべての子に一定レベル対応して、それぞれの分野別に対応して、その子のキャラクター別に対応してってことになるのかな」

【2000. 9. 28】

このように、多様なニーズで来館する若者たちに対して、ひとりひとりの「やりたいこと」、「ニーズ」を何気なく把握し、それに応える支援を意識的に行っているのである。しかも、

「あと、あんまつっこむとやばそうだなってときは、さーって引く。…それだけ緊張してないと、大人は。自然体でつき合うけど、やっぱ意識してつき合わないといけないかなあって」

【2000. 9. 28】

と、その支援が何気なく行われているとともに、職員からの関与を避ける若者への関わり方に意識を払っていることがわかる。

このような、若者ひとりひとりのやりたいことを何気なくかつ意識的に支援するやり方が、若者の「多様な距離のとり方」や「漸次的参加」を可能にしていたのである。

## B. 非利用者層に対する認識

職員は、現在ゆう杉並を利用していない層にも意識を向けている。

(筆者に対して)「荻窪あたりでダンスしてるどころ知ってますか?…オフィシャルダンスには人あつまるところになったけど、ここを練習場所にしてる子がいなくて。…場所探してるのか。出かけて行って声かけるっていうのも手だけど」

【2000. 5. 17】

というように、いまだ利用してない層に対してどのようにアプローチしたらよいかを考えている。

しかし、必ずしもストリートやクラブを活動の場とすることに対しては積極的な評価をしていない。

筆者「この辺(ストリート)でダンスやってるところはないですか?」

職員「吉祥寺でやってるって子どもたちはいった。ほかに渋谷の児童会館前とか。でもそういうところはお金をとるのが普通になってるみたいで、味しめている大人もいるから、金銭のトラブルとかもあるし、勧めてはいない。行くなら親と話し合って、といってる」

【1999. 9. 18】

このように、職員は、一方で非利用者に関心をもちつつ、他方で中高生の年齢も考慮して、ストリートな

ど大人の指導の届かない世界に対して、積極的な評価はしていないのである<sup>7)</sup>。

## C. 「教育的はたらきかけ」

「やりたいことの何気ない支援」を行う職員は、同時に直接的、間接的な「教育的はたらきかけ」を利用者に向けている<sup>8)</sup>。たとえば、受付で職員から声をかけられ、入館票を書かなければならないこと、館内に喫煙に対する厳しい注意書きが貼ってあること、ライブ時に自転車置き場を職員が警備していることなどは、間接的ながら、明確な教育的意図に基づくものであり、若者にそう感じさせるものである。

喫煙問題について職員は次のように述べている。

「開館して1年、『ゆう杉並』では子どもたちのトラブルが絶えなかった。その一つに喫煙がある。…この問題に職員は、正面から取り組み、何度となく彼等を読得して、禁煙することを要求した。一日に何度も注意することもあった。現在『ゆう杉並』で喫煙する中・高校生はいない。職員の注意から始まったが、今では自分たちの自律の精神で喫煙が消えている」

(鈴木2000, p.42)

18才以下の若者を対象とする公的施設であることが、職員を厳しい喫煙問題への対処に向かわせる。タバコ問題が表面化すれば、未成年を対象とした施設としてその存続も危ぶまれるおそれがある以上、ないがしろにはできない。職員たちは、喫煙やけんかといった十代の若者を対象とするがゆえの問題に対して、職員間の合意をつくり、若者と対話することによって対処してきたのである(杉並区児童青少年センター事業係2000)。実際、筆者のフィールドワーク期間中にそうした問題に出会ったことはほとんどなかった。その結果を、「自律の精神で喫煙が消えている」と職員は評価するが、それは同時に、職員の直接的な「教育的はたらきかけ」によって喫煙する若者の利用がなくなったことも表している。しかしそれは、職員のはたらきかけによって一方的に特定の若者が排除されたというわけではなく、「そういうとこって、管理人とかいるでしょ」という言葉に表現される若者の側の意識との相互関係によって生じているのである。

## 6. おわりに—「学校外支援の構造と機能」および残された課題

以上、公的施設を利用する者、利用しない者、支援する大人の三者の構造を、ゆう杉並に即して図示する

と図2のようになる。

若者たちは、学校教育が満たすことのできない多様なニーズでゆう杉並にやってきて、そこに多様な距離のとり方で関わっていた。そこでは、学校の部活動や他の組織的な活動には参加しない若者も自由利用から徐々に組織的な活動へと加わっていくプロセス(漸次的参加)が見られ、そこが「居場所」となっていると語る者もいた。換言すれば、ここではどのようにその場に関わりどのように利用するかの解釈主体性<sup>9)</sup>が、施設側ではなく利用する若者の側に存しているといえる。それを可能とする職員の「やりたいことの何気ない支援」が、学校の部活動や団体活動を忌避する若者も含めた多様な層の利用をえている理由であると推測される。その意味でゆう杉並は、学校から逃避し学校外の世界へと流れ出ていく若者に対する、学校外における支援の可能性を示したといえよう。

しかし、他方で職員による直接的、間接的な「教育的はたらきかけ」が若者に対して向けられており、それに対応するように公的施設を忌避する感覚が利用者の一部や非利用者のなかに見られた。これらが相俟って、「のけ者扱いされる」、「管理人がいる」施設として一定の若者を遠ざけてもいた。つまり、職員による支援のあり方、すなわち「やりたいことの支援」と「教育的はたらきかけ」のバランス、およびそれを受ける若者の側の関わり方との関係、相互作用によって、利用

者を増やしたり、遠ざけたりすることにもなるのである。

このように、若者や支援する大人の意識・行動のあり方、それらの相互作用によって、学校外空間にはその支援をめぐる種々の構造が構築され、維持されていくことになる。しかしそれは静態的、固定的なものではなく、意識や行動とそれらの相互作用の変化に応じてつねに変化する可能性をもっている。したがって、その構造の変化によって学校外における支援の機能は狭められもすれば広げられもするのである。

そうした若者の感覚と支援のあり方との相互関係によって、学校、学校外双方の支援から遠ざけられる若者がいることが推測される。ここでは必ずしも十分にとらえられなかったが、そうした支援を受けない若者が誰なのか(学校体験や社会的背景、下位文化)といった問題とともに、施設とは異なる場で大人の支援を避けて活動している若者の自己形成の意義と問題性をとらえることが求められる(新谷2002b)。それは、イギリスユースワークで行われている「デタッチトワーク(detached work)」(田中1988, 2001a)のような施設外での支援方法を取り入れるとした場合に、その前提として、その意義や方法を明らかにすることにもつながるだろう。

また、ここで論じることができなかった学校外支援の問題として「子ども・若者の参画」(意思決定への参

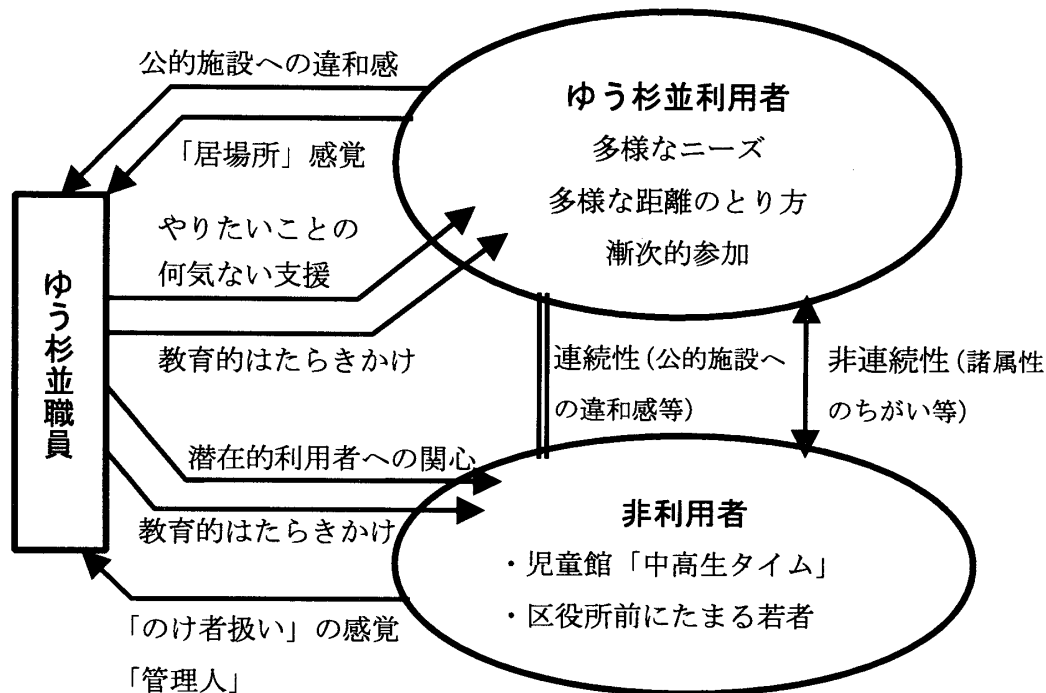


図2 学校外支援の構造と機能

加)の問題がある。ゆう杉並は、建設プロセスや運営に利用者の若者自身の参画を取り入れている施設でもある。子どもや若者のための「居場所づくり」において「参画」を進めていくことが重要だとされるが、その場合も誰が参画し、誰の利益となっているのかを見ていく必要があるだろう(新谷2002a)。

本研究は、学校外における若者支援の一事例をめぐる構造と機能を素描したにすぎない。若者の学校離れと学校の機能縮減により、ますます学校外における支援が重要になってくるだろう。今後、「居場所」、「参画」、そして職業支援も含めた諸実践が進められるとともに、それらが果たしうる機能を的確にとらえていく研究が求められる。

(指導教官 佐藤一子教授)

## 註

- 1) 学校の学習活動や進路活動へのコミットメントにおける生徒の出身階層差を指摘する研究は数多い(たとえば樋田ほか編2000, 耳塚ほか2000)。学校外の支援においても同じことが十分おこりうるのである。
- 2) ゆう杉並では、1999年9月より2000年10月までの1年余り、「研究生」という名札をつけて観察とインタビューを行った。その間、週に1〜3回程度フィールドに入り、帰宅後その日の記録をフィールドノートとして打ち込んだ。ゆう杉並周辺の児童館では、期間中3回フィールドワークを行い、区役所前の高校生は、ある日の夜から朝にかけて彼らに同行した。これらもフィールドノートに記録した。プライバシーに配慮して、登場する人物名はすべて仮名とし、個人が特定されないように性別等一部事実を改変してある。
- 3) ゆう杉並は、その目標の第一に「居場所としての役割」を掲げている。それは、「目的をもった活動を行うわけではなく、友だちとおしゃべりをしたり、その場の状況に応じて、仲間との交流や一人の時間を楽しむ」来館者への対応であり、具体的には、自由利用の時間を確保したり、来館者の要望に臨機応変に対応することであるとされている(平成10年度事業報告)。若者に居場所を提供することを目的とした施設はほかに、町田市子どもセンター「ばあん」(1999年開館)、佐倉市「ヤングプラザ」(1998年開館)、水沢市「ホワイトキャンパス」(1999年開館)などがある。また、従来の施設でも居場所の提供を目的とした事業を行っているところもある(たとえば京都市南青少年活動センター)。
- 4) ゆう杉並の1日の平均利用者は208.5人であり、そのうち7割が中学生である(平成12年度事業報告)。また、松木・定行(2000)によるゆう杉並周辺地域に居住する中学生を対象とした調査によれば、全体の84%の者がゆう杉並の存在を認知し、同66%が利用経験を持っていた。これらのことから、ゆう杉並の利用者が多数で、かなり広い層にわたっていると判断してよいだろう。なお、ゆう杉並等「居場所」提供を目的とした施設に関する論文は、職員自身によるもの(戸澤1999, 鈴木2000等)のほか、建築

学からその利用実態を扱ったもの(金丸ほか2000, 松木・定行2000, 渡海ほか2001等)がある。

- 5) 詳しくは新谷2001を参照。
- 6) 「中高生タイム」とは、児童館に集まる中高生のために、月に2〜4回ほど中高生優先で活動できるように設けられた時間帯のことで、バスケや卓球などが行われている。
- 7) 別の職員の論文においても、「(カラオケ, ゲームセンター, ファーストフード店など高校生の放課後の居場所について)そうした場所を利用することは別に悪いとは思いませんが、当然ながらお金がかかり、お金のない時には利用できないこと。くつろぐことは出来ても何か前向きにやりたいことを見つけ、できるという場所ではないこと。適切な注意・指導のできる大人がいないことから、喫煙から薬物まで違法行為にかかわる危険性が高いこと。等々いくつかの問題はあると思います」(戸澤1999, p.41)と商業施設やストリートの問題が指摘されている。
- 8) 宮原(1976)は、「自然生長的な形成の過程を望ましい方向にむかって目的意識的に統禦しようとするいとなみ」を「教育」と呼ぶ(p.7)。ゆう杉並職員による「やりたいことの支援」も広い意味で「教育」に含まれるが、それは若者の自己形成を目的意識的に統御するというよりは、若者自身のニーズを聞きとり、「自然的生長」を促す方向ではたらきかけが行われているといえる。それに対して、この項で扱う職員のはたらきかけは、若者の行動に対して、職員の側から目的意識的に「望ましい」方向に統御するものであるので、「教育的はたらきかけ」とした。
- 9) 岩見(1985)は、マス・メディアの情報を個人が解読するとき、送り手側のコード体系が明らかではなく、個人が自分のコード体系によって情報の解読を試みる場合、そこに受け手の側の「解釈主体性」が発揮されるとする。本稿では、施設や活動を提供する大人側の意図に従属することなく、若者の側でそれを自由に解釈し利用することができることを「解釈主体性」と呼んでいる。

## 参考文献

- 新谷周平1999「居場所」と「NGO・NPO」の可能性」『月刊社会教育』第528号
- 新谷周平 2001「居場所」型施設における若者の関わり方」『生涯学習・社会教育学研究』東京大学大学院教育学研究科社会教育学研究室
- 新谷周平2002a「若者の参画の機能—「ゆう杉並」中・高校生運営委員会を対象として—」『日本社会教育学会編「子ども・若者と社会教育—自己形成の場と関係性の変容—」(年報第46集)東洋館出版社
- 新谷周平2002b「ストリートダンスからフリーターへ—進路選択のプロセスと下位文化の影響力—」『教育社会学研究』第71集
- 大多和直樹2000「生徒文化—学校適応」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 金丸まや1999「中学生を対象とする施設に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』
- 金丸まやほか2000「中学生対象施設の利用実態に関する研究」『日本建築学会東海支部研究報告集』
- 古賀正義2001「〈教えること〉のエスノグラフィー」金子書房



- 佐藤一子1998「地域社会における子どもの居場所づくり」佐伯胖ほか編『ゆらぐ家族と地域』岩波書店
- 志水宏吉1998「教育研究におけるエスノグラフィーの可能性」同編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院
- 杉並区児童青少年センター事業係2000「杉並区児童青少年センターの中・高校生にせまる実践と展望」
- 鈴木雄司2000「中・高校生の居場所と『ゆう杉並』」『青少年問題』第47巻第3号
- 住田正樹2001「子どもたちの居場所と対人的世界」同ほか「子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在」平成10-12年度科学研究費補助金報告書
- 住田正樹ほか2001「子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在」平成10-12年度科学研究費補助金報告書
- 芹沢俊介2000「居場所について」藤竹暁編『現代人の居場所』至文堂
- 田中治彦1988「学校外教育論」学陽書房
- 田中治彦2001a「イギリスの青少年施設」小林文人・佐藤一子編『世界の社会教育施設と公民館-草の根の参加と学び-』エイデル研究所
- 田中治彦2001b「関わり場の場としての『居場所』の構想」同編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房
- 田中治彦編2001「子ども・若者の居場所の構想」学陽書房
- 東京シュレ編2000「フリースクールとはなにか」教育資料出版会
- 渡海裕司ほか2001「中高生のための施設とその利用実態に関する研究」住田正樹ほか「子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在」平成10-12年度科学研究費補助金報告書
- 戸澤正行1999「児童青少年センター『ゆう杉並』のとりくみと課題」『教育』第638号
- 久田邦明2000「子どもと若者の居場所」同編『子どもと若者の居場所』萌文社
- 久田邦明編2000「子どもと若者の居場所」萌文社
- 樋田大二郎ほか編2000「高校生文化と進路形成の変容」学事出版
- 藤田英典1997「教育改革」岩波新書
- 藤竹暁編2000「現代人の居場所」至文堂
- 松木要詩子・定行まり子2000「児童青少年センター『ゆう杉並』の利用実態と中高生の地域施設要求について」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』第6号
- 箕浦康子1999「フィールドワークと解釈的アプローチ」同編『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房
- 耳塚寛明ほか2000「高卒無業者の教育社会学的研究」平成11-12年度科学研究費補助金報告書
- 宮原誠一1976(初出1949)「教育の本質」『宮原誠一教育論集 第1巻 教育と社会』国土社
- 森岡清美ほか編1993「新社会学辞典」有斐閣